



左から藤本壮介氏、乾久美子氏、隈研吾氏、池上一夫氏。撮影：新建築社写真部

リアリティに拮抗する新たな想像力

——「再び『集まって住むこと』の豊かさ」 長谷工 住まいのデザイン コンペティションへ向けて

隈研吾×乾久美子×藤本壮介×池上一夫

今年で第5回となる「長谷工 住まいのデザイン コンペティション」。2007年に長谷工コーポレーション創業70周年を記念して第1回が開催され、これまで建築を志す多くの学生に集合住宅にまつわるテーマに取り組んでもらいました。第1回「300人のための集合住宅」では密度、第2回「30年後の集合住宅」では時間に対する変化、第3回「30戸の住宅から生まれ変わる集合住宅」では建て替え、第4回「10の違うものが集まる100戸の集合住宅」ではさまざま要素が集まることがテーマとなりました。第5回に先立ち、社会を取り巻く状況や、今、集合住宅をどう考えるかなどを審査委員の方々に話し合っていました。（編）

コンペを象徴するような応募案を

——まず、前回のコンペはいかがでしたか。

藤本 設計をする立場としてはおもしろい課題だったと思います。応募者がそれぞれ自由に、自分なりの解釈で課題に向かっていきました。ただ、いろいろな案が出てきて興味深かったのですが、「10の違うもの」を設定することへの戸惑いも感じられましたね。

隈 前回の上位案もアイデアや着眼点はおもしろかったのですが、課題にストレートに応えていませんでした。10の違う「もの」ですから、具体的な提案が多くなるかと思ったのですが意外にそうならなかった。今回はもっと具体的な提案を見たいですね。

池上 そうですね。抽象的ではなく、より分かりやすいテーマがよいかもしれません。

乾 前回、提出された応募案は悪くありませんでした。でも今回は、応募案を見ることで「あのコンペ」と思い浮かぶくらい印象的な応募案を見たいですね。

コミュニティが可能にするサステナビリティ

——集合住宅を考えるには東日本大震災の影響も考えざるを得ないと思いますが、いかがでしょうか。

池上 3月11日に東日本大震災が起こってから、私たちが手がけた集合住宅の居住者にアンケートを取ったところ、コミュニティと省エネへの意識の高まりが顕著に見られました。コミュニティについては、居住者同士、日頃のコミュニティの醸成が重要だという意見が多くを占めるようになりました。また、省エネについては、今までは国や自治体レベルの問題として捉えていたのが、身近な問題として自分たちひとりひとりが意識すべきと考える人が増えたようです。こうした生活者の意識の変化を捉えた、これからの集合住宅のあり方をテーマに盛り込めればと考えています。

隈 たしかに、コミュニティとはハードである建築や空間ではなく、ソフトとしてのネットワークのことですよね。そうしたコミュニティが存在することが最も身近なセキュリティとも言えます。20世紀型の集合住宅では資産価値が重視され、それを保証することがセキュリティだと捉えられていましたが、災害時は機能しませんでした。むしろ近くに住むおばあちゃんや、何かあった時に助けってくれるおじさんがいることがセキュリティと言えるのではないのでしょうか。多くの人もそうした考え方にシフトしてきたと思います。一方、先ほど省エネと言われましたが、サステナブルも切実な問題で、自分の将来に関係する問題として考え直すことが必要でしょう。そうすれば今までとは違ったサステナブルのあり方が出てくるかもしれません。

乾 そうですね。今までサステナブルな建築は機械や設備機器の力を借りて対処しようとするエネルギー的なものに偏っていました。サステナブル建築というと、技術武装したハイテクなビルを思い起こすほどです。サステナブルというのはエネルギーだけの問題ではなく、それまでにあった社会的な仕組みとセットで考えるべきものだと思います。それらと共に持続できないと本来の意味でのサステナブルとは言えないのではないのでしょうか。先ほ

ど話に出たコミュニティとエネルギー、このふたつは合わせて考えることができると思います。エネルギーの問題をひとつの建築で考えてしまうと、技術革新によって発電効率のよい太陽光パネルを付けるようなことだけで、あとは思考停止したままになるかもしれません。しかし重要なのは運用の場面で、人間がエネルギー問題を補う仕組みをつくることと、そのために有効な方法のひとつとしてコミュニティをもう一度構築するというものであってほしいと思うのです。つまり、エネルギーの問題を技術だけではなく、人のネットワークを構築することで補えば、本当の意味での持続可能性が出てくるのではないかと思います。

集まることの豊かさ

藤本 僕も乾さんと同じことを考えていて、コミュニティというか、集まって何かを共有している状態に新たな価値を見出せる時期だと思っています。ただ集まるのではなく、集まって共有しているものは何かを考える。それぞれ個別の生活はありながら、それらの関係をどうやって再構築するのかを真剣に考えてみる必要があると思います。震災以降、豊かさの価値観が変わり、僕たちは新しい視点を獲得できるのではないかとと思っています。街のつくり方、建築のつくり方、そして集まって住むことにも新たな視点が生まれるのではないかとこの期待があります。

乾 私は偶然にもこのタイミングで宮崎県延岡市のまちづくりに関わることになり、日々勉強しながら取り組んでいるところです。震災が起きてから、そうしたまちづくりがいかに重要か改めて気づかされました。まちづくりのことを考えていると、さまざまなプレーヤーの行動と時間帯のことが気になるようになります。人間には朝起きて昼に活動し、夜に眠るという生活のリズムがあるのと同様に、建築や都市、社会にもそうしたリズムのようなものが

見られ、それを利用するとよさそうな気がしています。それと同様に、エネルギーやコミュニティを考える時には時間と空間の概念を考えておかないとうまいいかないのです。まちづくりやコミュニティ形成も今回のテーマに関連すると思います。

隈 阪神・淡路大震災の時、建築家が何もできなかった苦い経験があります。だから今回の震災では設計やデザインが何かできるというメッセージを伝えたいと思っています。デザインをする、建築を計画する、つまり線を引くという行為には可能性が残されていると思います。今回のコンペもそれを見出す手がかりになればよいですね。

池上 私たちが手がけた200戸以上の集合住宅には非常用飲料水供給システムや非常用マンホールトイレを備えており、今回それが居住者以外の地域住民の方々にも役立つことができました。これは集まって住むことのメリットのひとつだと思います。また、この震災を機に新たな豊かさを見出せるのではないかとこの期待もあります。便利な道具に頼った便利な生活が送れなくなったことで、私たちの暮らしや、本当の豊かさを再考することになりました。そのために建築や集合住宅はどうあるべきか、まだ答えは出ていませんが、私たちも先ほどの話にあったようなコミュニティと省エネをテーマにしたワーキンググループを設けて考えているところです。それは長谷工が集合住宅を設計する時の指針や思想に関係してくるでしょう。今回のコンペでは、何か私たちが参考にできるアイデアがたくさん出てくるのではないかとこの期待が大きいのです。

紋切り型ではないアイデアを

隈 僕は「豊かさ」を今の学生がどう翻訳するのかに興味があります。質素さや、エネルギーを使わないことが豊かさであるといったありきたりな答

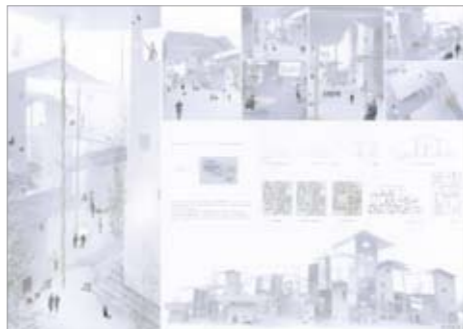
えが多くなってしまふことが心配な一方で、その紋切り型の答えを乗り越えた豊かさが提案されるのではないかとこの期待があります。

藤本 そうですね。建築というのはその時代ごとの豊かさをつくるものですよね。私たちは今まで想像もしなかった新しいリアリティを突きつけられています。それに対して押しつぶされてしまう豊かさではなく、そのリアリティに拮抗するような新しい想像力が求められています。課題としても集合住宅の根本である「集まって住むこと」をもう一度考えられるようなテーマがよいですね。

これまでの最優秀賞作品



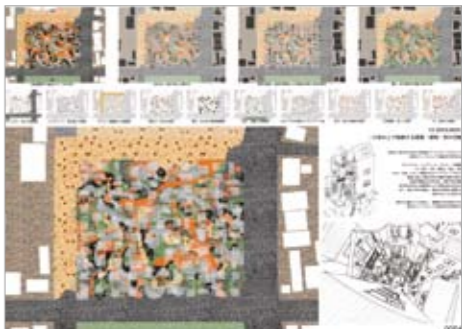
第1回「300人のための集合住宅」
「300人のランドスケープ」
高池葉子（慶應義塾大学大学院）+ 瀧浅崇史（慶應義塾大学）



第3回「30戸の住宅から生まれ変わる集合住宅」
「やねの森 roof forest」
井手口航 磯部陽一 山口貴司（慶應義塾大学大学院）



第2回「30年後の集合住宅」
「小さな都市、大きな家族」
富山晃一+岩元俊輔+津野田祐基（鹿児島大学大学院）



第4回「10の違うものが集まる100戸の集合住宅」
「10 GROUNDS 一大地の上で鼓動する建築・植物・街の活動」
西倉美祝（東京大学）

乾 テーマを決める時にどういう言葉を選ぶか、毎回悩みます。豊かさの再考というお話がありましたので、「再び『集まって住むこと』の豊かさ」はどうでしょうか。

隈 よいと思います。「集まって住む」という言葉は以前からよく使われますが、今だからこそ新鮮に受けとってもらえるのではないのでしょうか。

——それでは、今回のテーマは「再び『集まって住むこと』の豊かさ」といたします。

（2011年6月10日、長谷工コーポレーションにて）

文責：本誌編集部